

夏の幽霊

吉元昭治

夏の風景と申しますと、まず思い浮かべるのが、^か蚊帳、^や蚊やり、打ち水、縁台、すだれ、ほたる、花火に浴衣^{ゆかた}などがありますが、このうちにはもう遠い昔のものになってしまったものもあるようです。

これからのお話は、あいもかわらないバカバカしい、ユレイのおはなしです。「幽霊の正体見たり枯尾花」というくらい、実際にユレイなどはこわいものでもありません。おそろしい面相で人をおどろかし、それでゾクゾクとして厚さもとんでしまうという事でしょうか。冬にユレイ(雪女というのがあります)が出たという話はないようですが、ユレイも冬眠するのでしょうか。

今日も今日とて柴又はフーテンの寅さんのようなテキ屋の銀太という者が旅を重ねて夏のある夜、どうした事か道に迷い、とある墓地に迷いこんでしまいました。

銀太

「なんだかうす気味悪いところにやって来たぜ。どうも背中がゾクゾクしてきた。おまけにいやにうすらなま温かい風が吹いて来やがるぜ。やや、あっちにもこっちにも塔婆が立つてらあ、おまけに破れ提灯ときたね。これで舞台はおそろいだ」

幽霊

「もしもし」

という後からの声

銀太

「いよいよおでましかい」

幽霊

「もしもし」

ふり返るとそこにユレイ

幽霊

「もしもし」

銀太

「何んでえ」

幽霊

「ウラメシヤ」

銀太

「よく聞こえない、もう一度ぬかせ」

幽霊

「ウラメシヤ、ウラメシヤ」

銀太

「うるせいやい、さつきからきいていれば、ウラメシヤ、ウラメシヤはつかじやないか」

「これがユレイの御挨拶で」

幽霊

「これがユレイの御挨拶で」

銀太 「そうかい、それならユー公よ、おめえは本当にユー

レイかい。俺はさつきから腹がへつてたまんね、このうらにメシヤがあるならつれていけ」

幽霊 「ウラメシヤ、魂魄こゝろばこの世に留まりて恨みはらさずにおくべきか」

銀太 「何だと、コンパクトだと」

幽霊 「これもユーレイのきまり文句で、ところでそのコンパクトでなんでやす」

銀太 「おめえ、コンパクトもしらねえのか、コンパクトとは女の化粧道具だ。それも知らないとはお前はいつ頃の人間だい」

幽霊 「よく聞いて下さいました。私はザツと今を去ること百年以上前の人間です」

銀太 「へえ、するてえと文明開化の御時世だな。この稼業は長えのかい」

幽霊 「別に稼業といつてもユーレイをしていて金をもうけるのではないので」

銀太 「そうかい、お互いに今日は東にあしたは西に、行方ゆくえ定めぬ旅鳥、同業だ、それでなんでユーレイに身をおとしたんだい」

幽霊 「別に身をおとしたのではないのですが、話せば長い事ながらこの世に未練があつたからです」

銀太 「よかつたら、俺もひまだ、一寸ちよつとその話せば長い話を

聞いてやろうじやねえか」

幽霊 「私のこの世の名は嵐勘助あらしかんすけというたび役者のはしぐれで、少しは名のしれた歌舞伎俳優でした。得意の出しものは『らくだの馬さん』でした」

銀太 「何んでえ、らくだと馬が何で二つ並んでいるんでえ、らくだと馬とは違うだろう」

幽霊 「らくだの馬さんというのは役の名で、長屋きつて悪わるで皆から嫌がられていましたが、ある時、ふぐを食つ

て死んでしまいました。そこに、らくだに輪わをかけたやうな悪でらくだの遊び仲間の半次がやってきました。そこへまた、日頃出入りしている古道具屋の久六でえのがきまして二人でらくだが死んだのを見ます。半次は、いくら嫌われ者でも死んだら仏だ。とむらいの一つは出してやろうと、久六に、葬式費用にするから家中のものをみんな買っていけといいますが、家の中にはもう何もありません。そこで半次は長屋中にらくだが死んだ事を久六にいわせますと、長屋の連中は、皆ああよかった、らくだが死んだ、そりやめでたいお祝いだ。なんで葬式費用を出さなきゃならねえ。お祝いだ。そちらからもつてきやがれ」と逆に追い出されます。

銀太 「それでどうした」

幽霊

「こんどは半次、それならと、あの強欲な大家にかけあいに行かせます。でもやはりけんもほろろの御挨拶。半次はそれなら、らくだの死骸をかついでいって『カンカンノ』を踊らせると申しますと、「大家はそれは面白い、丁度ひまで困っている。俺はまだその『カンカンノ』という踊りは見たことがねえ、ぜひ見せてもらおう」というのです」

銀太 「うん、それでどうなった」

幽霊

「それならと半次は久六にらくだの死骸を背負わせて大家の家へ向かいます。ここからが私、嵐勘助の一番となります。久六におぶわれて大家の家にいきます。大家は香典なんかくれてやれねえ、たまつた家賃を早くもつてこいと力みます。そこで久六が『カンカンノ』を唄い、半次がらくだを抱いて、面白おかしく二人で呼吸を合わせて踊ります。大家とその家内は腰をぬかし、「やめてくれ、やめてくれ、わかつた、わかつた」と酒や肴を持たせ、二人をなだめて帰すという。そのあともありますが、ざつとこんな筋ですが一番の見せ場が私の踊ります『カンカンノ』踊りです」

銀太 「何でえその『カンカンノ』とは」

幽霊

「カンカンとは海の向こうの言葉で『看看』と書くらしいのです。つまり『御用とお急ぎでない方はよつてら

つしやい、みでらつしやい』というようなもので、長崎でうまれて大阪、江戸で大そうはやつたといひます」

銀太

「それでおめえがその『カンカンノ』踊り』の名手という事は分かつたが、なんでユーレイとなつたんだい」

幽霊

「旅の一座はあちこちをまわります。江戸について長興行をすることに成り、私のらくだは大当たり、そればかりしていましたが、ふとした事から大店の娘のお好というのと深い仲になりました。所詮浮草稼業の私と大店の娘とでは結ばれるはずありません。思いあぐねて二人は駆けおち『たとえこの世で結ばれなくてもあの世にあるという蓮の台の上で二人して幸せになろう』と互いに手と手を取り合つて、右にヨロヨロ左にヨロヨロ、大川めざしてこの世の別れの道行きとなりました。折しも遠く鐘の音、あれは冥土の道しるべ、三途の川の船出の合図と、大川の橋の上から身を投げました。私は袂に石を一杯つめていたので、そのままブクブク大往生となります」

銀太 「それでお好は」

幽霊

「お好の野郎は悪い女で、身を投げる寸前、たもとの石をほうり出してとびこんだのでプカプカ浮かんで助かつてしまいました」

銀太 「その後お好は」

幽霊 「私はユーレイに身をやつし、あちこち尋ねますとお

好は、やはりさる大店の若旦那と一緒に幸せに暮らしたそうです」

銀太 「聞けば涙の物語りだ。こりや死んでも浮かばれねえつてことだ」

とつくづくユーレイを見て

銀太 「おめえは役者だけあつてよく見ると水もしたたるいい男だね。ユーレイは水にぬれてビショビショしているが、お前の額の三角の布は何んでえ」

幽霊 「これはユーレイの看板です。ユーレイの生活が長くなる程、またユーレイの年齢が高い程、位くらゐが高くなつて、この三角が大きくなります」

銀太 「それじゃ今日や昨日のユーレイはほんの端切はしれぎだな」

幽霊 「ユーレイの先輩にききますと、まだお会いした事はありませんが、ユーレイ大明神は金色の三角、ユーレイ菩薩は銀色の三角だそうです」

銀太 「今インフルエンザが流行している。おめえの三角をはずして口にあてマスクとしてインフルエンザの予防にした方がよさそうですぜ」

幽霊 「ユーレイは死んでいるので風邪などひきません。こ

の三角はユーレイの目印なのではずすわけにはまいりません」

銀太 「どうもおめえのなりはパーツとしないね。その白装束もうすよこれているし、その前にだらりとたれている髪、櫛でもすいて切つてしまつてサツパリしたら、お前も役者のはしくれだ。その蒼白い顔に少しは化粧でもしたらどうだね」

幽霊 「そうですかねえ」

銀太 「お前の目もだよ。どうしてそうギョロ目なんだい。一寸は目をむすんで小さくしろよ。まるで“デメキン”」

だ。それからお前の手だよ。体を半身にかまえて、左右の手の高さちがつて、手をぶらりとこちらに手の背を向けている」

幽霊 「これはユーレイの基本姿勢です」

銀太 「それじゃこうしてみな。まず両手を同じ高さにして手の平をこちらに向け、体の前で交互にぐるぐる同じ方向に円をえがく」

幽霊 「こうですかい」

グルグルグルグル

銀太 「いいよ、いいよ、ぐるぐるぐるぐるると一回りしても

ともどる。その時、舌を出してパーと言う。つまりグルグルパーとなる」

幽霊 「グルグルパー、グルグルパー」

銀太 「うめえ、うめえ、上出来だ。これに生前の得意のカンカンノ一踊りをしながらやってみよう」

幽霊 「グルグルパーのカンカンノ一」

銀太 「お見事、でかした。俺もテキ屋でこれから出掛けなくちやならねえ。どうだいおれと一緒に仕事に回ってみねえか」

幽霊 「これも何かの御縁でしょう、御一緒させて下さい」

てな具合で二人は旅に出ます。

銀太は口上よろしく品物を売り、そばでユレーイが

グルグルパーのカンカンノ一をしています。

銀太の口上は

銀太 「おやじおふくろ口うるさい、土手の柳は風まかせ、好いたあの子は口まかせ、ああシヨンガイナ、シヨンガイナ、生姜は八百屋で売っている。生姜は寿司にもついてくる。お寿司のお稲荷さんはいなりずし、大トロ小トロトトロと、となりのぢいさえトトロトトロひるね、そば

で猫もトトロトだ。その猫の尻尾をふんだらニヤンといつて逃げていく。その後姿を見ていたら、結構毛だらけ猫灰だらけだ。お猿のおけつはまっかつか。まっかつかは赤とうがらし、とうがらしはピリツとからい。ピリツとしたら目がさめる。さめた所で手前とり出したるこのお品、お品、品川海に近い。海の方こうから日が昇る。昇る太陽アカアカだ。そこでやっぱり目がさめる。よう旦那、よくこの品見てくらん。今日は御当地で皮切りだ」

そばではユレーイが相変わらずグルグルパーのカンカンノ一で踊っています。人はますます集まって商売繁盛、グルグルパーで目がまわります。

銀太

「ようユー公よ、おめえにはずいぶんかせがせてもらったぜ。礼をいうぜ。このように毎日歩きまわっていると、つかれるだろう。この先にユレーイ屋敷というのがあるから、おめえそこで一つ興行をぶってみては」

幽霊

「私も昔とつた杵柄きねづかです。踊って皆様に見て頂ければ役者冥利やくしゃめいりにつきます。一つお願いします」

そこでユレーイ屋敷に二人でいき相談すると、やってみようということになりました。

興行主

「東西東西、世に珍しいユーレイのグルグルパーの
カンカンノ。まずは見てのお楽しみ、そんじよそこら
じゃお目にかからないよ。さあ入った入った」

なんて調子で小屋も満員御礼の御盛況。

ユーレイはもう死人ですから食べるものもいりません。
お給金もありません。ユーレイもここを先途と一生涯
命踊ります。

やがて夏も終わり、秋風もそよそよという頃になると
客足もとだえます。

幽霊

「あー本当につかれたよ。百年以上たつてこの世に出
てみると昔とくらべて騒がしく、目がまわる。止まっ
いたら後ろからけとばされる。横断歩道とやらも信号と
やらも訳のわからねえことばかし。とてもじゃねえが、
もうやっついていられねえ。この世とおさらばして早くあの
世に帰ってえ」

とドンドンと消えてしまいます。そこに

銀太やっ来て、

銀太

「あれー、とうとうユー公もおさらばしたか。本当に
いい奴だったがなあ。一年を四分の一（四季の内の夏た
け）で暮らすいい男とはユー公の事だ。気軽な稼業だぜ。
一つ線香でも手向けよう」

その線香の匂いにさそわれてか、ユー公の声。

幽霊

「挨拶もしないで消えてしまつて申しわけありません。
いろいろお世話になりました。あの世から見守つており
ますぜ」

銀太

「そんな事をいわず、また来年夏が来たら会おうぜ」

幽霊

「来年はまた別のところに出ます。『昔の名前で出てい
ます』(歌の名前)」

